

司書課程の授業を担当して

—反省と今後のこと—

吉田純子

2002年4月から司書課程の授業を担当し、1月の期末試験を経て、1年の授業のサイクルが終わった。

講義では、今の社会を生きる人々が図書館の利用者である以上、決して紙の上だけではない、現実の問題を取り上げ、一緒に考えることを目指したが、実現できたのは後期の「図書館資料論」であった。おりから、図書館がベストセラーを大量に購入し、貸し出しているという状況がNHKの「クローズアップ現代」で取り上げられ、また、著作者・出版者の利益を損なうものとして日本図書館協会と日本ペンクラブとのシンポジウムが開かれたりと関連する話題も多く、図書館資料の評価・選択を身近で考える良い材料となった。

通年の「資料組織演習」では、資料の主題に対して分類記号や件名を与え、書誌データを作成していくという過程でツール（『日本目録規則』、『日本十進分類法』、『基本件名標目表』）を十分に使いこなすことを目指したが、規則や記号の暗記ではないことにかえって戸惑いが多く、「ツールをよく理解して使う」ことへの意識の切り換えはあまりうまくいかなかった。社会人になれば、それぞれの職場で与えられる規則・ツールを用いて、結果を出していかざるを得ない。一つの規則が金科玉条ではなく、「この規則を使った場合はこの結果」というように相対化して理解してもらえればと思ったが、学生による授業評価の結果を見る限り、授業技術の未熟さもあり、学生には十分伝わらなかったようである。

司書資格取得のための科目を教えるのは、奥州大学（当時。1976年4月から富士大学に改称）の図書館専門職員養成講習（夏季集中講習）以来30年ぶりである。東北地方の有数の温泉地花巻温泉に泊まっただけの日々であった。目録作成の演習を担当したが、当時はまだ『日本目録規則1965年版』を使っただけの著者基本記入方式で（1977年に「日本目録規則新版予備版」が刊行され、記述ユニット・カード方式が採用されたが、現場への導入はすぐというわけにはいかなかった。）、標目に何を採用するかで記述部分が変わるため標目の決定は重要で、その決定方法の習得に当時の受講生は皆苦勞した。現行の目録規則は記述部分が一定なので、その分習得は大幅に容易になっている。

資料組織化技術を教えることに関連して、また別の経験がある。1985年東京大学附属図書館の電算化プロジェクトが始まった。これは、学術情報センター（当時。現国立情報学研究所）が開発したばかりの電算機による全国書誌目録であるNACSIS-CATへの図書データ入力を組み込んだものであった。当時、大規模大学はすでに電算方式による目録作成システムを独自に開発しているところが多く、当初の入力参加館は、4、5館という時期がしばらく続いた。そのため、参照データを流用するか全くのオリジナルデータを作成するかのどちらかで、このユーティリティの最初のデータ作成ということが多かった。このような中で、これまでカード作成を行っていたベテランの司書たちへの入力指導が始まった。まずパソコンの使い方、文字変換になれることから始め、マニュアルに従った入

力を覚えてもらう。入力コマンドの使い方、画面遷移、書誌データ項目、区切り記号など初めてのことばかりで大変な騒ぎであった。一方で、寄贈を受けた大量の洋書のデータ作成に学内の学生パワーを利用した。入力のツールを整え、指導をきちんとすれば学生でもデータ作成は可能との考えからであった。若い頭脳は目録規則を用いての入力の流れをすぐ吸収した。(後には複雑な洋書目録規則の知識も必要とする古典のコレクションの入力をこなせるまでに力をつけたと聞く。) このことから、しっかりしたツールが用意されること、ツールを十分に理解することが必要であり、それを満たせば誰でもデータ作成ができるとの確信を持った。演習においても、ツールを使って作業ができ、求められる結果が生み出せる力をつけることを目指し、今後も努力していきたい。

ところで、なぜ書誌データを作成し、データベースを構築するのだろうか。それは利用者の求める資料を探す手段を提供するためである。目録の場合、入力するデータに価値があるのでなく、あくまで利用者と資料との橋渡しとなるものであり、検索されてはじめて入力したデータが生きる。(初期のシステムでは、検索されないことがしばしばあり、若い職員たちと検索勉強会を持ち、自分たちの入力したデータがどのように検索されるかの実証を行ったこともある。) 全文検索技術等の高度化につれ、目録検索方式の機能・性能がどんどん向上している。2002年は、この面で二つの大きな出来事があった。国立国会図書館がWeb-OPACに代わる新たな機能を組み込んだNDL-OPACの提供を開始したことと国立情報学研究所が次世代のNACSIS WebcatとなるWebcat Plusを公開したことである。Webcat Plusは連想検索機能などの検索機能・性能を大幅に強化し、使い勝手を向上させている。NACSISデータは当時の検索技術の制約を受け、当初漢字かな文字は冒頭からしか検索できなかったが、現在は改善されている。検索上の種々の制約があるところでは、入力規則も細かくならざるを得ないが、今後はその面の負荷はますます軽くなっていくのかもしれない。演習でも、検索を念頭において作業することが大切であり、それを体験する時間を設けていきたい。

図書館の重要な機能のひとつは、利用者の求める資料・情報を知る「道しるべ」を提供することであり、当面の図書館は、いまなお発行され、かつ過去の膨大な蓄積のある本・雑誌等パッケージ系の資料・情報を探す手段の提供を続ける必要がある。従来の資料組織化の技術は改善を重ねつつ継承・習得される必要がある。一方で、今後の技術革新、特にユビキタス社会ともいわれ、電子チップやケータイ電話機能の拡大、そしてとどまることを知らないネットワーク系情報の増大等に図書館はどのように対応していくか。これらの動きを授業にどのように取り込んでいくかが今抱える大きな課題である。

(よしだ・すみこ 別府大学教授)